

「星空と路—3 がつ 11 にちをわすれないために—」
『鈍行旅日記』上映会アフタートーク

開催日時：2023 年 3月12日 16:00-17:30

話し手：福原悠介（『鈍行旅日記』制作者／映像作家）

進行：佐藤友理（せんだいメディアテーク）

佐藤：せんだいメディアテークの「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター（わすれン!）」担当の佐藤と申します。よろしくお願いいたします。そして今日は、今ご覧いただいた『鈍行旅日記』を制作された福原悠介さんに来ていただいています。

福原：福原です。よろしくお願ひします。

佐藤：福原さんは、以前から「わすれン!」の参加者として活動されていて、この『鈍行旅日記』も、「わすれン!」の映像作品として上映していただきました。これは震災の記録なんだろうか?と思われた方もいらっしゃると思うので、その辺りについてもお聞きしたいんですが、そのためにもまず福原さん自身のことを聞いていきたいと思います。簡単に自己紹介をお願いできますか?

福原：福原悠介と申します。映像の仕事をしていて、仙台を中心とした地域の文化やそこに住む人をテーマとしたドキュメンタリー映画なんかを撮っているんですが、その延長線上でこの映像も作品として作っています。元々仙台の生まれで、東京で映画やテレビの仕事をしていたんですが、2009 年頃に仙台に戻ってきました。

佐藤：震災の時は仙台にいたんですか?

福原：地震が起きた時はちょうどメディアテークの 2 階にいました。3 階の図書館で本を読んでいたんですが、電話がかかってきたので、2 階に下りて折り返していました。当時は無職だったので、アルバイトの採用の電話だったんですが、その電話中に揺れが来て、今はなくなりましたがトイレの前にコインロッカーがあって、そこにしがみついて揺れが収まるまで待っていました。

その後、ボランティアでも行こうということで、知り合いと石巻に行ったりしていたんですが、その頃にメディアテークで、アーティストのタノタイガさんが人を集めてバスで石巻にボランティアに行くという「[タノンティア](#)」という企画をやっていると聞いて、それに便乗

して行くようになりました。当時、映画監督の濱口竜介さんがドキュメンタリー映画を撮りに仙台に来ていたんですが、そのバスツアーのことも記録しに来ていて、そこで話したりするうちに現場を手伝ったりするようになって。そんなところから、メディアテークを介していろんな記録の活動をしている人たちと繋がりができました。

佐藤：その後、「わすれん！」にはどのように関わってこられたんでしょうか？

福原：2012年から、「わすれん！」の参加者に機材を貸したり、編集の技術的な相談に乗ったりする仕事をするようになりました。僕はそれまで映画やテレビの仕事をしていたので、最低限映像の撮影や編集ができたということもあり、それで声をかけてもらったんです。今ご覧いただいた映像の冒頭で「震災後から10年やった仕事を辞めて」と言ってるのは、その仕事のことです。「わすれん！」には、最初は参加者としてではなく、参加者の人たちに機材を貸したり編集の相談に乗ったり、そういう関わり方をしていました。いわゆる市民、映画監督、アーティストも含めて、当時の大変な状況下で何をどうしたらいいかわからず、みんなで話し合ったり、対話したり、協力し合ったりしながら手探りでいろんな記録を作っていたという過程を、10年間ずっと傍らで見っていたわけです。2017年には僕自身も参加者になって、『[飯舘村に帰る](#)』という飯舘村の方々へのインタビュー映像を撮りました。そういうことがあり、さまざまな立場の、プロもいればアマチュアの人もあるし、いわゆる作品みたいなものもあれば淡々とした記録もあり……といういろんな映像を見てきたんですが、震災から10年経って、そういう記録がこれからどうなっていくんだろうと、ふと思うようになりました。それまでは、5年経ったけど、8年経ったけど、いま記録できるものがあるはずだと、「その時記録すべきものは何か」という問いが常にあったと思うんですけど、10年を機に「いろんな人が作ってきた記録はこれからどうなるんだろうか」ということを考えるようになって。

「わすれん！」は、プラットフォームという言い方をしていますが、記録を集めるのではなく、参加者を集めるというコンセプトでやられているんですね。つまり、「震災の記録とはこういうものです、それをください」というふうに、枠組みを設定してそれに合う記録を集めるのではなくて、その枠組み自体を超えていくような、あるいは枠組み自体を問い直すようなものを集められる場所にしかかったのかなと、見ていて思っていました。市民の震災の記録を集めると言っているけれども、そもそも市民とは誰なのか、震災とは何なのか、記録とは何なのかという、境界を常に問い直すような動きやコンセプトが「わすれん！」としてあったのかなと。そのためにプラットフォームと呼んだり、記録自体ではなく参加者を募ったりしているんだと思うんです。

いわゆる報道的な、メッセージがはっきりした記録であれば、何年経ってもそのようなものとして見られるのかもしれないんですが、「わすれん！」の記録は、そうやって境界が曖昧に生み出されていくことの意味を問うようなものだと思うので、時間が経てば経つほど、よ

り曖昧になっていかざるを得ない部分がある。よって、その記録の行き着く先が想像しづらかった、という感じですね。

佐藤：福原さんは、ご自身も「わすれン！」の参加者でありながら、ほかの参加者と直接関わるような立場でもあったわけですが、加えて「わすれン！」がこれまでに発行した100本以上のDVDもすべてご覧になっていますよね。そんな方はなかなかいらっしやらないです。それらの映像の中には、編集されたものもあれば撮りっぱなしの生の映像もあり、説明されないとなかなか意味や文脈が伝わってこないような記録もあります。それらがこれからどう受け止められていくのだろうか？という問いが、今回の旅の動機になっているということですか？

福原：そうですね。まあ単純に、仕事を辞めて暇だからということが正直あったわけですが。僕はもともと映画が好きなので、三里塚、水俣、阿賀などについて、そこでドキュメンタリー映画をつくった作家たち——小川紳介、土本典昭、佐藤真というドキュメンタリーの三大巨頭みたいな人たちがいるんですが——彼らの映画への興味から、それらの土地にアプローチしてきました。公害や社会問題への興味というよりは、映画が優れた作品であることによって、その土地への関心を持ったという経緯があったんです。そこで、今改めてその土地に立ってみて、かつてその土地で撮られた映画を観たという経験は何だったのかということ、映画からではなくその土地から見てみたら、もしかすると震災の記憶がこれからどうなっていくかが見えてくるのではないかと。水俣も広島も、出来事からはもうすでに何十年も経っているので、宮城・仙台でのこの10年よりもっと長い期間、土地と記録の関係が変わり続けてきた場所なわけですよね。そういう土地で改めて記録を見た時に、震災後の記録と土地との関係がこれからどうなっていくのかということについて、何か分かることがないだろうかと考えて、行ったわけです。

佐藤：日記の中でも、いろいろな場所を巡りながら、記録映像や映画を見て感じたことを書かれていたと思うんですが、自分が生まれるずっと前のことだったり、感覚的にあまり理解できないような出来事があった場所で、実際に映像や記録をご覧になってみて、どんなことを感じられましたか？

福原：例えば岡山の愛生園で見たハンセン病の方の映像とか、広島の平和記念資料館で見たインタビューとかは、いわゆるテレビ的なものではないそのままの記録があるんですが、原爆が落ちた直後の状況などは、やはり僕らには直接は分からないわけで。もちろん資料や文献などをたどりながら当時の状況を勉強したり想像したりすることはできるんですが、リアルな体感——例えば僕らが2011年3月にその現場に行った時の感覚と同じようなものは、ほとんど失われていると思うんですね。その中で、そういう人たちの語りを聞いた時に

何が伝わってくるかという、その人たちの顔とか声とか、その人の存在そのものがむしろ伝わってくるのではないか、という感じがしました。当初のメッセージや目的がだんだん失われていくかもしれない中で、しかしそれでもそこには何かが映っていて、映像がより純粋に映像になって見えるようになる、という感覚があった気がします。それが、この『鈍行旅日記』の中でも言っていますが「記録自体はずっと変わらない」ということです。当たり前のことなのですが。映っているものは変わっていないけれど、受け取るこちら側が変わっているのだということを思いました。

佐藤：この旅日記は福原さんが旅をしながらずっと書き続けていたもので、映像の中では一部抜粋したテキストを朗読しているの、いま見た映像の中にはなかったと思うんですが、元の日記には、記録は変わらないけれど受け取る側が変わり続けていることについて、「例えば『お地蔵さん』は、『変わらないものと変わり続けるものの関係』そのものである」と書いてありました。そのことについて、少しご説明いただけますか？

福原：はい。新潟編はばっさりカットしてしまったので映像には映っていません。それはなぜかと言うと、新潟では『阿賀に生きる』（監督：佐藤真、1992年）という映画の発起人だった旗野秀人さんと、震災後に陸前高田や仙台で記録をしていた映画監督の小森はるかさんらと一緒にいろいろな場所を回っていたので、何も撮影できなかったというだけなんです。

旗野さんはずっと新潟水俣病の患者さんたちの支援をされている方で、支援というか、もう今は一緒に思い出を作るみたいな、「冥土のみやげ企画」というのをやられているんですが、その旗野さんがここ数年で、お地蔵さんを作っているんです。新潟水俣病に関わりのある場所にお地蔵さんを建てたり、熊本の水俣にもお地蔵さんを贈ったり、そういう活動されているということで、実際にお参りに行ったんですね。旗野さんはありとあらゆることをやられてきた方ですけども、やってお地蔵さんにたどり着いた、というようなことを言われていました。お地蔵さんは、新潟水俣病に関わりのある土地に置かれてはいるんですが、その経緯が分からないと、お地蔵さんを見たところで水俣病について学べるわけではない。石で作られているからずっと残ると思うんですが、これが何十年か経ったらどうなるんだろうと想像したら、たぶん水俣病のことをあまり分からずにただふらっとそこに人が来ても、そこにお地蔵さんがあれば、自然と手を合わせてみたりとかするだろうなど。阿賀で起こった悲惨な出来事を伝えるためにあるものではあるんですが、そういうのを超えて、ただそこにある。お地蔵さんを作った人がいて、今もそれが残っていて、なんだか分からないけれど手を合わせる。それって本当に、記録と人との関係そのものだなと思ったんです。

何かを残した人がいて、受け取る人がいて、そのメッセージはいずれ忘れ去られてしまうかもしれないけれど、何かを伝えたいということだけは伝わってくる。むしろメッセージがないことによって、純粋に「伝える」ということだけが伝わってくるという、そういう感じが

したんですね。お地蔵さんが石でできているのは、たぶん残るからだと思うんです。残ること自体を残すというか。だからお地蔵さんは、石という素材、メディウムで作られた、記録という行為の擬人化なのではないか、というふうに思ったという感じです。

佐藤：お地蔵さんのことが気になって私も調べてみたんですが、事件や事故が起きた場所に建てられたり、あるいはここに綺麗な花が咲いていたとか、そういう理由でも建てられたりすることがあるらしく、ただ実際には、なぜ建てられたのかが分かっていないものも多いそうです。まさに、文脈は分からなくても、誰かが何かを伝えようとしたということだけはそこにある、ということなんですね。

『鈍行旅日記』は、福原さんがそんなふうに「記録について考えた記録」だと思うんですが、直接の震災の記録ではないけれども、これを「わすれん！」のアーカイブに残すことについてどのように考えているのか、お聞きしてもいいですか？

福原：この全国のグルメ情報満載の映像がなぜ「わすれん！」に入るかということですけど、先ほども説明したように、「わすれん！」の参加者の方々の活動をずっと見てきて、それらの記録が今後どう見られていくんだろうかと考えた人もいたんだな、ということも「わすれん！」の中に入っていたらいいんじゃないかと思った、という感じです。「わすれん！」の記録も、時間が経てば経つほどお地蔵さんみたいなものになっていって、純粋な映像そのものになっていくんだと思うんです。遠くない将来、東日本大震災を全く知らない世代の人たちが、「わすれん！」の記録を見るような時が来るでしょう。その未来の人と同じような体験というか、当初あった文脈を離れて過去の記録映像を見たということ経験自体が、わすれん！の記録の中に残っていたら、もしかしたらそれが、時代を超えて映像を見ることの何かひとつの手がかりになるかもしれないと考えました。そういう意味では「震災の記録について考えた記録」というのも一種の震災の記録だと思うし、逆に言えば、この「わすれん！」の枠組みの中に入ってこそ初めてそういう意味を持つのではないかと思ったので、アーカイブに入れさせてもらいました。

ちなみに言うと、当初は作品を作ろうとしていたわけではなくて、暇だから水俣まで行って、一人で行って何もしないのももったいないから日記でも書こうかなと思って、どうせだから映像もついでに撮っておくか、という感じでやっていたものなので。普段はビデオカメラで撮っているんですが、これは iPhone で撮っています。「わすれん！」の参加作品として作ろうみたいなことは、出かける前は全然考えていなかった。でも撮ったものや書いたものが何だったのかを改めて考えてみたら、「わすれん！」に収めるのが一番意味があるだろうと判断したというか、あとから気づいたということですね。

さきほどお話ししたように、市民による震災の記録をアーカイブする「わすれん！」は、そもそも市民とは誰なのか、震災とは、記録とは何なのかという、その境界を問い直すような場所でもあったと思います。そういう意味で『鈍行旅日記』は、震災から 10 年以上が経っ

た現在から、わすれン！とは何かを改めて問い直すような、僕なりの問題提起でもありません。

来場者 A：今まで見た福原さんの映像の中では、一番面白かったような気がします。旅日記で進行していったのがとても良かったと思います。笑えるところがいっぱいありました。最後のほうで、記号と映像についての話がありましたが、それがちょっと分かりにくかったので、説明していただけたら。

佐藤：「希薄な意味としての映像に見出される記号とは何か」という問いについてですね。

福原：これはわざと分かりにくく言っているんですが、でもいま言ったようなこと、つまりお地蔵さんのようなものになるであろうという意味です。本来の文脈がどんどん失われていった時に、それはいわゆる記号ではなくなっていく。当初のメッセージが失われていくということは、後世の人がそこに何を見出していか分からなくなっていくことなのだとすると、しかしでも、その元の映像は変わっていない。誰かが、どこかが映っているものなので、後世の人はそれを見てそこに何か意味を見出すはずだと。それは何か？ということですよ。

来場者 A：それが記号化されたものようになる？

福原：その「記号」の意味をここでは普通とずらして使っています。記号があって、それを見る人が受け取るというのが普通だけれど、本来あった記号が元のような意味では記号でなくなった時に、しかしそこにやはり記号があるとすれば、それは見る側が見出すものである、ということです。

来場者 A：つまり時の経過によって、その映像自体が変わるものではないということですね。だから、時が経過して行って、同じ人であれ違う人であれ、それを見た時に変容していくというか、そういうものになるだろうということですね。とてもよく分かりました。

来場者 B：途中から拝見したんですが、すごく面白くて、ひねくれた感じに共感するところがあって、最初から見ればよかったと後悔しているんですが、面白かったです。2点、聞いたかったことと、しっかり聞けなかったことがあって。まず一つ、卑近な話で申し訳ないんですが、カレー屋さんの名前をもう1回教えていただきたいです。もう一つは、こういったアーカイブも含めてですが、映像を何かしら残すじゃないですか。いわゆる公道とかそういったところで撮ったものはある程度アップすることが可能だと思うんですが、震災があったとか、何か重要なものがあつたと思った、それを撮影する、それをアップするという時

に、今はものすごく著作権みたいなものがナイーブになっていますよね。でも市民レベルで何かを作ったとか、商業レベルには乗らないけれども世の中に出したいといった時に、どのレベルまで撮影許可みたいなものを考えていかなきゃいけないのかな？と。自分も今映像を撮ってるんですけど、まだ全然駆け出しで、お願いする時にどれくらい気をつけていらっしやるのか、どういったところに問い合わせたりするのかというのを、教えていただければと思います。

福原：それは非常に重要な問題だと思います。アップとおっしゃったので、つまりウェブに上げるということだと思うんですが、そうすると本当に全世界で誰でも見られる状況になるので、やはりそこは気にする必要があります。逆に言うと、気にすることが必要なので、やはりケースバイケースとしか言いようがない部分があると思います。映っている人との関係性もありますし。なので、基本的には気にすべきで、気にすることが必要だという抽象的な返しが一番正しいと思うんですが、なるべく聞くのは本当に必要だと思います。ただ、どこかで完璧にはできない時が来てしまうので、最終的には自分が責任を取るところだと思いますね。これはどこまでも個別具体的な問題で、撮る側も撮られる側も「こうすれば大丈夫」という方法論はないというのが大前提です。許可を取ったから、書類を書いてもらったからオッケーという話でもない。だから、できるのは「気にする」ことだけなのだと思います。

あと、大阪のカレー屋は「ナツラマナム」です。めちゃくちゃ美味しいんでぜひ行ってみてください。結構人気店で、カウンターも少ないんで、開店のちょっと前に行くといいと思います。

来場者 C：僕も今日途中から入ってきたんですけど、昨日1階の会場で1時間見させてもらいました。やっぱり展示会場とシアターで見るのでは全然イメージが違うというのがるので、今日間に合う分だけでも見たいなと。1階の会場ではさまざまな記録が一堂に会していて、周りでは全然違う目的でカフェを利用している方もいる。そういう音の中でこの映像と朗読の声があって、まさに昨日という瞬間が入り込んだ状態だったので、昨日は昨日で面白い見方をしたかなと思います。最初はそんなに見るつもりじゃなくて、まず10分くらい見てみようと思って座ったら、あれよあれよと一周見てしまったというのが、この映画が良かったシンプルな理由です。映像と言葉が合っているようでズレているのが面白くて。澁谷浩次さんのライブのところでは澁谷さんについて何かを語ったりはするんですけど、基本的に、語っている内容と流れている映像がリンクしているようでしてなくて、解釈が見る側に委ねられていて。映像が非言語的なメッセージとしても伝わってきて、逆に言葉が言語というよりは風景に見えるような瞬間も、僕の中ではあったりしました。この「星空と路」に改めて戻ってみると、この言葉が持っているふわっとした、漠然としたイメージ……星空は、やっぱり当時仙台とか被災地にいた方は見ている方が多いと思うん

ですけど、漠然とした不安、これからどうなるんだろうと思ったのと同時に、僕はやっぱり、なんて綺麗な星なんだろう、地上ではこんなにも悲惨なことが起こってるのに皮肉だなあ、なんてすごく思っていたんです。『鈍行旅日記』のような作品がアーカイブに残ると、この「星空と路」というテーマとか、根本的な、根源みたいなものにかかなり近づいていくのかなって。震災の月にこれまで何回か「星空と路」の展示を見てきて、参考になるし、すごいなと思ってじっくり見てしまう記録がいっぱいあったんですけど、正直今までは、「星空と路か？」って思うと帰り道がそんな気分でもないというか。でも今回の福原さんの映像は、こんなに私的な旅で、最初は震災を語る目的もなかったのに、不思議とどこかでかする、グラデーションのように震災のことを考えさせられてしまった。そういうちょっとした、補色じゃないですけど……震災っていう色がもしも青だとしたら、色彩学的に言うと青の反対があって、黄色とかだと思うんですけど、反対のようできてやっぱり繋がっているんですよ。そんなグラデーションの色を足してくれたような気がします、という感想です。ありがとうございました。すごくいい映像です。

福原：素晴らしい感想をありがとうございます。「星空と路」というネーミングは2012年から使われていますが、僕自身、ここ数年になってよりしっくりくるようになった気がします。そういう感覚の変化は、震災や「わすれん!」、そのほかのさまざまな記録や表現について考えるうえでも、とても重要なことだと思います。